第４章

コア・カリキュラム　解説

Ⅰ．小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム 解説

［１］外国語の指導法【２単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の学習・指導・評価に関する基本的な知識・指導技術を身に付ける。

外国語の指導法は、小学校における外国語活動・外国語の学習・指導に関する知識を身に付けるとともに、授業における指導と学習評価の基礎を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「現在の小学校外国語教育についての知識・理解」「子どもの第二言語習得についての知識・理解」）、「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の２つからなる。学習形態は、講義形式に留まることなく「授業観察や体験」、「模擬授業」などを通して小学校の実際の外国語活動・外国語の授業の実態について知るとともに、児童の立場で授業を体験したり教師の立場で模擬授業を行ったりすることを通して、理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

１．授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識及び児童期の第二言語習得の特徴についての知識を扱う。ともに外国語活動・外国語の授業の土台となる知識であり、これをもとに実践力を身に付けることが重要である。また、中学年での外国語活動と高学年での外国語の２つの教科等について学習することが大きな特徴である。小学校の外国語教育と併せて中・高等学校について扱うことを通して小学校の役割を明確にする。また、子どもの第二言語習得の特徴について学ぶことで、中・高等学校とは異なる指導法の在り方について理解を深めることが求められる。さらに、自治体や学校によって指導体制や教育課程が多様であることを理解することも必要である。

（１）小学校外国語教育についての基本的な知識・理解

小学校での外国語教育について、主に制度面等を扱う。教育課程での位置づけ、外国語活動・外国語の目標や内容、導入の経緯や変遷、主教材等、現在の外国語活動・外国語についての基本的な知識を身に付け、児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。また、外国語教育において小学校が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

小学校における外国語教育に係る背景知識・主教材、小・中・高等学校の外国語教育における小学校の役割、多様な指導環境について理解する。

◇学習項目

①学習指導要領

到達目標：小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動・外国語、中・高等学校の外国語の目標・内容について理解している。

解説：小学校における外国語教育は、学習指導要領改訂のたびに大きく変化しており、その変遷を理解することの重要性は他教科等と比較して大きい。教科ではない外国語活動と教科としての外国語両方の目標・内容を扱うことも大きな特徴である。全人教育を目指す小学校における英語教育の位置づけを理解し、併せて、英語教育改革の大枠をとらえるため中・高等学校の学習指導要領にも触れることが肝要である。

②主教材

到達目標：主教材の趣旨・構成・特徴について理解している。

解説：文部科学省作成の外国語活動（中学年）用新教材は長期にわたって使用されることが想定される。また、外国語（高学年）においては次期学習指導要領の先行実施期間の2018年・2019年（平成30年・31年）は文部科学省作成の新教材（児童用冊子、教室用デジタル教材、教師用指導書、年間指導計画例、学習指導案など）を使用し、完全実施の2020年（平成32年）以降は検定教科書が使用される。今後、受講する学生が教員として採用された後、使用することが想定される主教材について、その趣旨・構成・特徴等を扱うことが必要である。

③小・中・高等学校の連携と小学校の役割

到達目標：小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。

解説：英語教育改革の大きなうねりの中で各校種が担う役割を俯瞰することを通して、小学校が果たすべき役割を深く理解することが重要である。校種間の円滑な連携のためにも、教員養成の段階で小学校だけを扱うのではなく、中・高等学校の英語教育についても扱う必要がある。その際、実際の授業を参観したり、映像で視聴したりできることが望ましい。

④児童や学校の多様性への対応

到達目標：様々な指導環境に柔軟に対応するため、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している。

解説：近年、様々な特徴を持った児童が在籍している。外国語活動・外国語の指導にあたっては、個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うことが重要である。例えば、文字指導に配慮を要する児童に対して、視聴覚教材を活用したり、ワークシートで取り組み状況が分かるよう学習を可視化したりするなど、児童の実態に合わせた指導が必要であることを理解する。また、児童が学校や英会話教室などで外国語を学び始めた次期が異なるため、児童の学力差や、学級間、学校間の差が見られるとの指摘もある。習熟に時間を要する児童については、目標に到

達しつつある過程を教員が適切に評価することによって、児童の更なる学習を支援して学習意欲を維持したり、目標を超えた伸長が見られる児童はその先を見通し、学習意欲を維持したりできるような個に応じた学習を行う必要があることを理解する。また、学級の人数が少ない場合は、複式学級による指導体制をとっていること等も理解し、ペア・ワークやグループ・ワークの学び合い学習やICT等の効果的な活用等の地域の実態に合わせた指導の工夫が必要であることを理解する。

（２）子どもの第二言語習得についての知識とその活用

外国語学習の主体である子どもがどのように学び、対象であることばがどのように学ばれるのか、その特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との連携がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校の授業場面と結び付けながら授業を行い、第二言語習得理論の知見をもとに日本の現状にあった指導法を追究する視点を持つことが求められる。

◇一般目標

児童期の第二言語習得の特徴について理解する。

◇学習項目

①言語使用を通した言語習得

到達目標：言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる。

解説：中学生等のより高年齢の学習者であれば、ルールを学んだ上でそのルールを使いこなす訓練を通して外国語を身に付けることもあるのに比して、子どもは使うことを通して言語を習得するという特徴を持つ。その意味は大きく、授業の在り方そのものに大きな影響を与える。外国語活動においても外国語においても、単なる音声の暗記とその披露に終始することなく、聞く活動においても話す活動においても、指導者や自分の気持ちや考えを伝え合う中で外国語を習得するような授業になることが重要である。

②音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス

到達目標：音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる。

解説：子どもが音声に対して敏感であり、話者が何を意図しているか、教室で何が起こっているか類推する特徴を持っていることを理解し、授業において子どもが音声と意味内容を結び付けやすい場面を作ることが重要である。指導者が多くのことを説明しすぎると、能動的な学習態度が損なわれ、分からないことに対する耐性が育たない可能性があり、受動的なことばの使い手を育ててしまうことになりかねない。

③児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方

到達目標：児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。

解説：子どもが音声に対して敏感であり、音声の聞き分けや模倣が得意なことは、早期に外国語学習

に取り組む意義として挙げられている。年齢が低いほど受容した音声の影響を受けやすいことを理解し、より自然な英語特有のイントネーションやストレスで正確な音声を与えることの重要性を深く理解する。指導者が授業の中で唯一の英語の供給源になる必要はなく、様々な教材や ALT 等を活用した音声の指導が有用である。

④コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと

到達目標：コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる。

解説：ことばには必ず伝えるべき意味内容があることを認識し、子どもに生きたことばとして英語を出合わせるよう授業をつくる必要がある。適切な場面設定や文脈の中で真の情報の授受を伴う意味のあるやり取りを行うことの重要性を理解した上で、練習を行う際も空疎な口頭による反復練習に陥らないことが重要である。

⑤受信から発信、音声から文字へと進むプロセス

到達目標：受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。

解説：ことばは音声言語から文字言語へ、受信言語から発信言語へ、というプロセスで獲得されることを深く理解し、音声による受信が充分でない段階で、発話させたり文字を見て音声化させたりする指導を行わないことが重要である。音声言語や文字言語の習得のスピードや方法には個人差があることについても扱う。

⑥国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき

到達目標：国語教育との連携によることばの面白さや豊かさへの気づきについて理解し、指導に生かすことができる。

解説：母語以外のことばと出合うことで母語及び言語全般への気づきや関心が高まることが期待される。また、ことばの大切さや豊かさに気づく機会ともなる。英語学習というとその実利的な面が強調されがちではあるが、指導者は「ことばの教育」という視点を明確に持ち、特に学級担任の場合は国語の授業も担当することが多いことから、外国語活動・外国語においても児童がことばの面白さや豊かさに触れられるような言語経験ができることを目指す。

２．授業実践

児童期にふさわしい外国語活動・外国語の授業を実施するための、音声面を中心とした基本的な指導技術を身に付けるとともに、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である題材・教材・指導計画・指導体制・ICT 等の活用・学習評価について基本的な内容を学習し、実際に学習指導案を作成する。「授業に必要な知識・理解」とは車の両輪の役割を果たし、指導力の土台となる。それぞれの学習項目について、外国語活動・外国語の両方等に対応できる指導力に寄与するよう、指導を工夫することが求められる。

（１）指導技術

受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを実践する指導技術を身に付ける。音声によるインプッ

トの与え方、やり取りを通じた音声によるアウトプットの引き出し方、文字によるインプットの与え方・読む活動への導き方、文字によるアウトプットへの導き方を扱う。特に音声によるインプットの質と量を確保することは、小・中・高等学校を通じた外国語教育の基盤をなす部分であり、良質の音声教材の使用を含めた指導力を確実に身に付けることが求められる。

◇一般目標

実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①英語での語りかけ方

到達目標：児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。

解説：授業で目標とする英語表現を、児童の興味・関心に合う内容・場面と結び付けて、丁寧にフルセンテンス（完全な英文）で聞かせることを目指す。意味内容と音声が結び付いたら、インプットの量を確保するためにも、同じ表現でも飽きさせずに何度も聞かせる技術を身に付けることが肝心である。この点は、英語にあまり自信がなく、とっさに多彩な英語表現を産出することに苦手意識を持っている指導者の場合は特に重要である。

②児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方

到達目標：児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる。

解説：児童が言いたくなるような場面や文脈をつくり、十分インプットを与えながら自然な発話を引き出すこと、英語にならない子どもの反応や発話を受け止め、児童が伝えようとしていたことを英語にして返すなど、適切に反応しながらやり取りを進めることを目指す。インプット・インタラクション・アウトプットの営みは、一連の流れの中で起こることを理解する。

③文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方

到達目標：文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる。

解説：文字言語でもインプットを多く与えることの重要性を理解する。文字遊び等を通して文字に触れさせ親しませる、聞いたり話したりしている音声を文字の形で児童の目に触れさせる、音声で慣れ親しんだ表現をなぞったり書き写したりできるよう導くなど、段階的な指導が必要である。授業で扱う書体については、国語教育でのローマ字や中学校での英語の文字指導の実態を参考にする。

（２）授業づくり

外国語活動・外国語の目標や内容を深く理解し、主教材を使用した授業を実施できることが求められている。実際に学習指導案を作成する際には、適切な単元目標を設定した上で、単元を構成する各授業を計画することが必要である。また、短時間学習での指導や外国語活動・外国語特有のティーム・ティーチングも行えるよう理解を深めなければならない。児童の第二言語習得の特徴を踏まえた授業づくりを目指す。

◇一般目標

実際の授業づくりに必要な知識・技術を身に付ける。

◇学習項目

①題材の選定、教材研究

到達目標：題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる。

解説：授業で目標とする英語表現が、意味を伴って児童に届くよう題材を適切に選定することが重要であること、またそのためには子どもの興味・関心や日常生活・他教科等の学習内容などについて深い理解が不可欠であることを理解する。また、授業において子どもの理解を助け、活発なやり取りを引き出すために教材が果たす役割は大きい。特に音声教材を選定する際には、インプットの質を維持するためプロソディーが崩れていないものを見抜く力が必要である。今後、中学年では文部科学省から新教材が配布されることに伴い、外国語活動では馴染みのある教材になることが予想される。豊かなインプットや活発なやり取りを可能にするような新教材以外の絵本の選定や扱い方にも触れることが望ましい。

②学習到達目標、指導計画（１時間の授業づくり、年間指導計画・単元計画・学習指導案等）

到達目標：学習到達目標に基づいた指導計画（年間指導計画・単元計画・学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメントなど）について理解し、学習指導案を立案することができる。

解説：学習到達目標に基づいた年間指導計画・単元計画について扱いながら、学習指導案作成を含む１時間の授業づくりの実際を経験する。児童の実態に合わせて適切な単元目標を設定することの重要性を理解し、その上で単元計画を立てることが必要である。また、１時間の授業を構成する様々な活動に実際にふれながら、ある程度レパートリーを増やす。活動を考える際は、ねらいに沿って段階を踏んだ活動内容を工夫することが必要である。短時間学習の設計にあたっては単元全体を通した指導との関連を常に意識し、単なるドリル活動にならないことが重要である。

③ALT等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方

到達目標：ALT等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。

解説：学生が実際に教壇に立つ時には、単独で授業を行う力だけでなく、ALTやJTEなどの外部人材と効果的にティーム・ティーチングを行う力も必要である。ティーム・ティーチングは他教科等の指導法の授業でふれる機会が少なく、外国語の指導法特有の学習項目であるといえる。現状では、外部人材が授業を主導する等課題も指摘されている。外部人材はあくまでも補助的な役割の担い手であることを深く理解することが必要である。また、外部人材の雇用形態に起因する授業場面での制限や特徴についても触れることが肝要である。

④ICT等の活用の仕方

到達目標：ICT等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる。

解説：小学校外国語教育と ICT は親和性が高いという認識があり、『Hi, friends!』のデジタル教材な

ど日常的に活用されている教材も多い。ICT 教材には、インプットの質と量を補ったり、意味と音を結び付けたりする役割が期待される。児童が身に付けても困らない音源を選定する力を身に付けることも肝要である。音声面のみならず、文字指導や読み・書きの領域については、国語教材と共通する部分もあり、有効な活用法が提唱されることが重要である。発展的に ICT を用いた教材作成などを扱うこともできる。

⑤学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）

到達目標：学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）について理解している。

解説：小学校外国語活動（中学年）及び教科としての外国語（高学年）における評価について、なぜ評価するのか、何を評価するか、どのように評価するのかについて基礎的な知識を得る。とりわけ、次期学習指導要領に示された新しい評価の３観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）や、５つの領域に関わる目標とその評価の在り方、小学校の発達段階に適した多様な評価方法のあり方、小学校から中・高等学校まで見通した具体的な領域別の目標とその基本的な考え方、指導と評価の一体化等について学ぶ。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

① 授業観察：小・中・高等学校の授業映像の視聴や授業の参観

解説：実際の小・中・高等学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童・生徒の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

② 授業体験：授業担当教員による指導法等の実演（学生は児童役として参加する等）

解説：学習者の立場に身を置くことで、学習者の視点から活動や指導法を経験し、それぞれの活動や指導法の長所・短所を体験的に学ぶことができる。こうした経験は授業参観・視聴と併せて、指導に必要な知識・技能を認識することや、模擬授業や教育実習の授業のイメージを持つことにつながる。

③ 模擬授業：１単位時間（45分）の授業或いは特定の活動を取り出した模擬授業

手順例：計画→準備→実施→振り返り→改善→再計画……

解説：実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味が大きい。英語に苦手意識を持っている学生にとっては、模擬授業の中で簡単な英語を話すだけでも大きな挑戦となることがある。実際に模擬授業を実施することで計画段階でも不備や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためにも受講者の人数には配慮が必要である。

［２］外国語に関する専門的事項　【１単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における外国語活動・外国語の授業実践に必要な実践的な英語運用力と、英語に関する背景的な知識を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な基本的な英語表現を、十分正確に運用できる力を身に付けること、そのために英語に関する背景的な知識を理解することを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な英語力」（「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」）及び「英語に関する背景的な知識」（「英語に関する基本的な知識」「第二言語習得に関する基本的な知識」「児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）」「異文化理解」）の２つからなる。英語に関する背景的な知識を土台に、小学校での授業実践を意識した５つの領域の総合的な英語運用力の習得を目指すことが重要である。本コア・カリキュラムでは、目標とする英語力の指標としてCEFR B1レベル（英検２級）程度を提案する。また、本科目の受講だけで総合的な英語運用力を身に付けるのは難しいため、教職課程を履修する学生を対象とした「英語コミュニケーション」などの英語科目の中でも、授業実践に必要な英語表現やその練習などを積極的に扱う必要がある。

【学習内容】

１．授業実践に必要な英語力と知識

(1) 授業実践に必要な英語力

質の高いインプットを与え、意味のあるやり取りをするためには、授業で必要な基本的な英語表現を正確に運用する力を育成することが不可欠である。目標とする英語力の指標として CEFR B1 レベル（英検２級）程度を提示しているが、資格を取ることだけが目的化しないよう配慮が必要である。特に「聞くこと」「話すこと」で英語特有の抑揚・強勢・リズムを身に付けること、「読むこと」では児童文学や子ども向けの歌や詩に親しむこと、「書くこと」では学習指導案や掲示物において正しい表記ができるようになることが肝要である。

◇一般目標

小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な実践的な英語運用力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①聞くこと

到達目標：授業実践に必要な聞く力を身に付けている。

解説：児童の英語を聞き取ることはもちろんのこと、ALT 等の話していることを正確に理解し、音声教材の内容を正確に聞き分けられる力は、授業実践に不可欠である。個々の単語の発音だけではなく、文や切れ目ごとのかたまり（チャンク）を意識して聞き取る力を向上させることが肝要である。そのためには繰り返し良質な音声インプットを受け、英語の音声の特徴（プロソディーや音素）について正しく理解することが必要である。

②話すこと（やり取り・発表）

到達目標：授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）を身に付けている。

解説：質の高いインプットを児童に与えるためには、英語特有のイントネーションやストレスを理解し、正確に運用できることが肝要である。また、児童の発言を適切に言い直したり、児童の発話を引き出すような効果的な語りかけ方を身に付けるためには、相手意識を持って自分の思いや考えを伝える「意味のあるやり取り」ができる適切な場面を設定して練習することが重要である。また、自己紹介などの発表活動を行う際には、準備の仕方から発表する際の目線やジェスチャー、発声法などを総合的に扱う必要がある。受講生が話すことに自信を持って授業運営ができるようになることを目指し、繰り返し練習を行うことが大切である。

③読むこと

到達目標：授業実践に必要な読む力を身に付けている。

解説：授業で児童文学を読み聞かせたり、子ども向けの英語の歌や詩を扱ったりする際に、意味内容を理解し、文字と音を正確に結び付け、英語のリズムを崩さずに読めるようになることが大切である。そのためには、繰り返しのある平易な文学・歌や詩から始め、人前で声に出して読む経験をすることが肝要である。また、ただ読むだけではなく、読むことと話すこと（やり取り）が相乗的に効果を生むような実践的工夫（例：絵本を読み聞かせた後で、内容について児童に質問するなど）も意識して取り扱う必要がある。

④書くこと

到達目標：授業実践に必要な書く力を身に付けている。

解説：学習指導案や年間指導計画に記載する英語表現や、児童の目に触れる掲示物などの表記を正しく行うことの重要性について意識を高めることが大切である。印刷物は一度公開されてしまうと、訂正することが難しい。また、掲示物は児童にとって大切な「文字インプット」であることを理解し、分かりやすく正確な表記をしなければならない。表記の誤りに自ら気がつけるようになるよう、読んだり書いたりする経験を積み重ねて感覚を養うことが重要である。

（２）英語に関する背景的な知識

外国語活動や中学校と接続する外国語科の授業を下支えする英語に関する知識として、英語の音声・語彙・文構造・文法・正書法等についての知識、第二言語習得理論に関する基本的な知識、児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）、異文化理解を扱う。これらは外国語活動・外国語の授業づくりに密接に関わるものであり、その知識を得ることは自信を持って授業を行うことを可能にする。これらの知識を小・中学校の接続も踏まえながら養成段階から十分に身に付けておくことが肝要である。

◇一般目標

小・中学校の接続も踏まえながら、小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。

◇学習項目

①英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）

到達目標：英語に関する基本的な事柄（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）について理解している。

解説：小学校では特に、音声学に関する基本的な知識を身に付けていることが肝要である。これまで繰り返し解説で述べているプロソディーのみならず、各音素（子音連結や二重母音を含む）の調音法や発音記号、音節構造や発音と綴りの関係などについて、日本語との違いを意識しながら学ぶ必要がある。また、運用力の土台となる豊富な語彙や文法知識、書く力を支える正書法などを理解しておくことも重要である。実際の運用場面を意識しながら、これらの事項について理解を促すことが大切である。

②第二言語習得に関する基本的な知識

到達目標：第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している。

解説：子どもが第二言語を習得する際にどのような過程をたどるのか、特に理解可能なインプットの重要性（インプット仮説）や、人とのやり取りを通して言語を習得する（インタラクション仮説）などの基本的な事項を理解することが重要である。また、実践に役立つように、受信することを十分に経験してから発信を促す、音声言語の習得が文字言語の学びにつながるなどの理論的背景を理解することは授業づくりに直接結び付くので重要である。

③児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）

到達目標：児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）について理解している。

解説：英語で書かれた絵本や子ども向けの歌や詩は、英語特有の音声を身に付け、文字と音の関係に気づく手掛かりとしても活用できるが、児童がその背景にある文化を知ったり、自分たちの経験と関連付けて内容を理解したり、歌や絵本の登場人物に共感したりすることを通して、異文化理解教育や情操教育とも関連付けることができる。授業実践を念頭に、どのような児童文学（絵本、歌や詩等）をどのように子どもたちに出合わせたらよいかを扱うことが重要である。

④異文化理解

到達目標：異文化理解に関する事柄について理解している。

解説：児童が、様々な国や地域の子どもたちがどのような思いでこの同じ地球上で生活しているのかを知ることは「世界とどう関わるか」を考える素地を育む上で重要である。このことを念頭に、外国語というツールを使って様々な文化背景を持つ人とコミュニケーションする体験的な機会を提供することも重要であるが、自国の言語や文化と同様に異言語や異文化を尊重し、相互依存の関係や地球的な課題について考える機会も与える必要がある。

［３］効果的な運用のための手立て

①　シラバス

コア・カリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを１回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を１回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。特に教科に関する科目においては、授業を行うのに必要な英語力を身に付けることが最重要視されることが期待される。

② クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③ 担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

Ⅱ．中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム 解説

［１］英語科の指導法【８単位程度を想定】

【全体目標】

中学校及び高等学校における外国語（英語）の学習・指導に関する知識と授業指導及び学習評価の基礎を身に付ける。

【学習内容】

（１）カリキュラム／シラバス

◇一般目標

中学校及び高等学校の英語教育の基軸となる学習指導要領及び教科用図書（教科書）について理解するとともに、学習到達目標及び年間・単元・各時間の指導計画について理解する。また、小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領並びに教材・教科書について知るとともに、小・中・高等学校の連携の在り方について理解する。

◇学習項目

①学習指導要領

到達目標：中学校及び高等学校の外国語（英語）の学習指導要領について理解している。

解説：中・高等学校における「外国語」（英語）の目標と内容について理解する上で、学習指導要領と学習指導要領解説の内容を理解することは必須である。学習指導要領の内容を理解し、その理念を実現するための指導の在り方を考察する。

②教科用図書

到達目標：中学校及び高等学校の外国語（英語）の教科用図書について理解している。

解説：学習指導要領に基づいて作成され、文部科学省の検定に合格した教材が教科用図書（教科書）である。中・高等学校の英語の授業においては、教科書の内容を熟知し、それを最大限活用することが求められる。教科書には様々な種類があるので、ティーチング・マニュアル等を含めて、図書館などで学生が常に参照できるような環境を整備することが必須である。

③目標設定・指導計画

到達目標：学習指導要領の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力等」の３つの資質・能力（以下、「３つの資質・能力」という）とともに、領域別の学習到達目標の設定、年

間指導計画、単元計画、各授業時間の指導計画について理解している。

解説：年間を通した領域ごとの学習到達目標の在り方について理解するとともに、目標達成のための年間指導計画、各単元の指導計画、そして各時間の授業計画について理解する。

④小・中・高等学校の連携

到達目標：小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領や教科用図書等の教材、並びに小・中・高等学校を通した英語教育の在り方の基本について理解している。

解説：中学校で英語を教えるためには小学校での指導事項を把握しておく必要があり、高等学校で英語を教えるためには中学校での指導事項を把握しておく必要がある。そして、小・中・高等学校での指導が有機的に結び付くことで、より高い教育効果が期待できる。中等教育課程の英語科の指導法においても、小学校の外国語活動（現在は５・６年生、2020年度より３・４年生）及び教科としての外国語（2020年度より５・６年生）の学習指導要領や教材例について理解する機会を提供することが必要である。

（２）生徒の資質・能力を高める指導

◇一般目標

中学校及び高等学校における３つの資質・能力を踏まえた「５つの領域」（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」及び「書くこと」）の指導及び各領域を支える音声、文字、語彙・表現、文法の指導について基本的な知識と技能を身に付けるとともに、複数の領域を統合した言語活動の指導方法を身に付ける。また、教材やICTの活用方法を知るとともに、英語による授業展開やALT等とのティーム・ティーチングの方法について理解する。さらに、　生徒の特性や習熟度に応じた指導について理解する。

◇学習項目

①聞くことの指導

到達目標：聞くことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：生徒に英語を聞く能力を身に付けさせるための指導法のバリエーションを知り、それぞれの特質について学ぶ。聞くことの指導においては、生徒に英語を聞かせて内容理解問題の答え合わせをすることが多く、活動がテストのようになりがちであると言われている。生徒に聞くことの能力を身に付けさせるための指導技術を知ることが重要である。

②読むことの指導

到達目標：読むことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：生徒に英語を読む能力を身に付けさせるための指導法のバリエーションを知り、それぞれの特質について学ぶ。読むことの指導においては、英文和訳に偏ることなく、英語を英語で理解させるための指導技術を身に付けることが肝要である。

③話すこと（やり取り・発表）の指導

到達目標：話すこと（やり取り・発表）の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：話すことの指導においては、討論・議論、交渉のような双方向の「やり取り」と、スピーチのような一方向の「発表」の能力を高めるための指導技術を身に付けることが必要である。事前準備されたやり取り・発表と、即興のやり取り・発表の両方を扱う。事実を記述・説明する、自分の考えを根拠・理由を示して述べる、自分の気持ちを述べるなど、様々なタイプのスピーキング活動について理解し、指導に生かすことが望まれる。

④書くことの指導

到達目標：書くことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：書くことの指導においては、和文英訳に偏ることなく、英語でまとまりのある文章を書かせるための指導技術を身に付けることが肝要である。社会生活における言語コミュニケーションにおいては、手紙、電子メール、SNS（Social Networking Service）、（文字による）チャットなど、「書くこと」による双方向のやり取りが極めて頻繁に行われている。英語によるコミュニケーション能力を身に付けさせるために、こうした書くことによるやり取りの指導を取り入れたい。

⑤領域統合型の言語活動の指導

到達目標：複数の領域を統合した言語活動の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：５領域の言語活動を言語の「インプット」「アウトプット」「インタラクション」という観点でとらえると、インプットは聞いたり読んだりして理解すること、アウトプットは話したり書いたりすること、インタラクションは口頭や文字でやり取りをすることに相当する。中・高等学校における５領域の指導法を英語科の指導法で扱う際には、これらを適切に扱うことが求められる。また、それぞれの領域を単独で指導するだけでなく、英語で理解した内容について、要約したり他者に説明したり他者とディスカッションしたりするなど、複数領域統合型の言語活動のさせ方についても学ぶ。

⑥英語の音声的な特徴に関する指導

到達目標：英語の音声的な特徴に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：英語の音声の仕組みについては、「教科に関する科目」の「英語学」の領域において学んだ知識・能力をもとに、中・高等学校の生徒に英語音声の特徴を効果的に指導する方法を学ぶ。英語の音声的な特徴に関する指導については、個々の音素だけでなく、アクセント、リズム、イントネーションなどのプロソディーを身に付けさせるための指導法を扱うことや、日本語との比較の視点を取り入れることが求められる。生徒の発音の特質を理解し、生徒の発音の誤りを矯正する方法について学ぶことも必要である。

⑦文字に関する指導

到達目標：文字の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：文字に関する指導においては、文字自体の読み書きに加え、特に英語の音声と文字の結び付きを身に付けさせるための指導法を取り上げることとする。音声と文字の結び付きを身に付けさせる指導

には、フラッシュカードなどによる全体的な（holistic）アプローチと、フォニックスなどによる分析的な（analytic）アプローチがあるが、それぞれの特質と指導方法を学ぶことが重要である。

⑧語彙・表現に関する指導

到達目標：語彙・表現に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：語彙・表現に関する指導においては、発音と綴りの関係を中心とした語句の「形式」と、語句の内容に視点を向けた「意味」を理解させるだけでなく、語句の「使い方」を身に付けさせることが重要であり、英語科の指導法においては、それを達成するための様々な指導技術について学ぶ必要がある。意図的学習と偶発的学習、導入の活動と定着のための活動、生徒の自律的学習を支援する辞書指導も扱うこととする。

⑨文法に関する指導

到達目標：文法に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：中・高等学校での文法事項の導入の仕方や定着のための活動について学ぶ。明示的な説明だけに頼ることなく、現実の言語コミュニケーションの要素を採り入れた活動の中で文法を身に付けさせていく指導法について学ぶことが重要である。文法習得におけるインプット、アウトプット、インタラクションの役割、明示的指導や機械的ドリルの役割と限界、コミュニケーションの要素を取り入れた文法指導における留意点、文法指導の帰納的アプローチと演繹的アプローチの特質について学ぶことが必要である。

⑩異文化理解に関する指導

到達目標：異文化理解に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：中・高等学校の学習指導要領「外国語」においては、これまで一貫して文化の重要性について言及されてきている。また、グローバル化が急速に進む中で、英語は、いわゆるネイティブ・スピーカーのみならず、世界の人々によってコミュニケーションのための国際共通語として用いられている現状があり、英語圏の人々のみならず、英語を母語としない多様な言語圏・文化圏の人々と意思疎通するための異文化コミュニケーションの能力の育成が求められている。学習指導要領の理念を具現化し、グローバル化した世界で生きる力を生徒に身に付けさせるためには、英語担当教員自身が世界で英語を用いる人々の文化の多様性を認識し、その理解を深めることが必要である。「教科に関する科目」の「異文化理解」の領域の科目で異文化コミュニケーション能力を身に付けるとともに、英語科の指導法において、それを中・高等学校の英語教育に生かす方法について学ぶ。

⑪教材研究・ICT等の活用

到達目標：教材及びICTの活用について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：教科書の活用の仕方、補助教材の選択・作成・活用の仕方、板書計画について実践的に学ぶとともに、音声、映像、プレゼンテーション・ソフトウェア、デジタル教科書、電子黒板、タブレット端末等の効果的な活用法、放送やインターネットを利用した指導について学ぶ。ICTの機能を最大限に生かす方法を知るとともに、機器の利用に関する留意点や課題についても認識することが重要である。

⑫英語でのインタラクション

到達目標：英語でのインタラクションについて理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：中・高等学校では、英語で英語の授業ができるように学習指導計画を作成し、生徒と英語でやり取りをすることが求められる。そのためには、生徒の習熟度に合わせて、教師は自分が使う英語を調整する必要がある。そのための能力は、「教科に関する科目」の「英語コミュニケーション」領域の科目において身に付けるとともに、英語科の指導法においても、クラスルーム・イングリッシュ、ティーチャー・トーク、文法事項や題材の導入や復習、会話やディスカッション活動における生徒とのやり取りなどの場面を設定して、英語でインタラクションをする能力を身に付ける機会を確保することが重要である。

⑬ALT等とのティーム・ティーチング

到達目標：ALT等とのティーム・ティーチングについて理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：ALT等とのティーム・ティーチングにおける効果的な指導について学ぶ。ティーム・ティーチングにおいては、授業設計及び授業準備段階での打ち合わせ、授業内の役割分担と臨機応変な対応が必要になる。学習指導案や授業映像など、指導の実践例を活用して、ALT等とのティーム・ティーチングのイメージがつかめるようになることが望まれる。

⑭生徒の特性や習熟度に応じた指導

到達目標：生徒の特性・習熟度への対応について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：一斉授業の中で多様な特性や習熟度を持った生徒たちをいかに効果的に指導するかは、英語科のみならず学校教育の大きな課題の１つである。生徒の特性や習熟度の多様性について知るとともに、特性や習熟度の的確な把握の仕方及び特性や習熟度に応じた効果的な指導方法について学ぶ必要がある。また、学生同士のディスカッションも取り入れて、問題意識を高めることが求められる。

（３）授業づくり

◇一般目標

中学校及び高等学校の学習到達目標に基づく各学年や科目（高等学校）の年間指導計画・単元計画・各時間の指導計画及び授業の組み立て方について理解するとともに、学習指導案の作成方法を身に付ける。

◇学習項目

①学習到達目標に基づく授業の組み立て

到達目標：学習到達目標に基づく授業の組み立てについて理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：年間を通した学習到達目標と、それに基づく年間指導計画の設定の仕方を理解し、単元の指導計画、そして個々の授業の組み立てを考える。前例に基づいて漫然と授業計画を立てるのではなく、学習目標達成のためにどのような指導が効果的なのかを自ら考えたり話し合ったりして授業を組み立てていくことが大事である。

②学習指導案の作成

到達目標：学習指導案の作成について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：指導の目標・手順、評価の観点・方法などを系統立てて記述する方法を学ぶ。略案と細案、英語による学習指導案と日本語による学習指導案、学習指導案の書式のバリエーションなども知っておく必要がある。

（４）学習評価

◇一般目標

中学校及び高等学校における年間を通した学習到達目標に基づく評価の在り方、観点別学習状況の評価に基づく各単元における評価規準の設定、さらに評定への総括の仕方について理解する。また、言語能力の測定と評価の方法についても併せて理解する。特に、「話すこと（やり取り・発表）」及び「書くこと」については、「パフォーマンス評価」（生徒が実際に話したり書いたりする活動の過程や結果を評価する方法）について理解する。

◇学習項目

①観点別学習状況の評価、評価規準の設定、評定への総括

到達目標：観点別学習状況の評価とそれに基づく評価規準の設定や評定への総括について理解し、指導に生かすことができる。

解説：中・高等学校の授業においては、個々の単元や授業で評価規準を設定し、それを学期末に観点別学習状況として評価するとともに、それらを評定へと総括する。その理念と方法について学ぶとともに、評価規準の設定については実際の授業での実例に触れておくことも必要である。

②言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）

到達目標：言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）について理解し、指導に生かすことができる。

解説：妥当性、信頼性、実行可能性、波及効果の点で望ましい評価の在り方について学ぶ。「聞く」「読む」能力の測定・評価においては、実際に英語を聞かせたり読ませたりする直接的タスクを用いることが一般的であるが、「話す」「書く」能力の測定・評価においては、信頼性の確保と実行可能性（時間、コスト、人員など）の問題から、ペーパーテストによる多肢選択問題などの間接的タスクが用いられることも多い。「話す」「書く」能力の測定・評価においても、可能な限り実際に英語を話させたり書かせたりするパフォーマンス評価を取り入れることが求められる。そのためには、信頼性と実行可能性を確保しながらパフォーマンス評価を実施する方法について学ぶ必要がある。

（５）第二言語習得

◇一般目標

学習者が第二言語・外国語を習得するプロセスについて基礎的な内容を理解し、授業指導に生かすことができる。

◇学習項目

①第二言語習得に関する知識とその活用

到達目標：第二言語習得理論とその活用について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：第二言語・外国語が習得されるメカニズムを理解した上で指導を行うことは、生徒の英語学習を成功に導く上で非常に重要である。言語適性、認知要因、情意要因、学習方略などの学習者要因と第二言語習得との関係などについて理解し、それを中・高等学校の英語教育に生かす方法について学ぶ。

【学習形態】

解説：上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、次の学習形態を必ず盛り込むこととする。

○授業観察：授業映像の視聴や授業の参観

○授業体験：授業担当教員による実演を生徒の立場で体験

○模擬授業：１単位時間（50分）の授業或いは特定の言語活動を取り出した模擬授業

手順例： 計画→準備→実施→振り返り→改善

英語科の指導法の授業においては、教員の講義に留まることなく、「授業観察」「授業体験」「模擬授業」という学習形態を盛り込むことが必須である。

「授業観察」とは、小・中・高等学校の授業映像を視聴したり、実際の授業を参観したりして、授業の観察と分析を行うことである。可能であれば、実際の授業を参観する機会が確保できるとよいが、授業参観をするには、受け入れ態勢の確保の問題がある上、授業参観時に学生が他の授業を欠席しなければならなくなり、他の授業の学習機会の保証という点での問題も大きい。従って、モデル授業や実際の授業を収録したビデオ映像を積極的に活用したい。

「授業体験」とは、授業担当教員による指導法等の実演に対して学生が生徒役として体験・参加することである。中・高等学校の英語科教員を招いて指導の実演をしてもらうことも推奨される。

「模擬授業」は、１単位時間（50分）の授業或いは特定の言語活動を取り出して、クラスメートを生徒役にして学生が実際に指導をしてみる活動である。基本的な指導手順は、①授業計画→②授業準備→③授業実施→④振り返り→⑤改善案の提案、である。特に、模擬授業の実施においては、授業の様子をビデオで撮影するとともに、コメントカードなどを学生に配布し、時間内に模擬授業についてのコメントを書いてもらうとよい。授業後にはディスカッションを行うとともに、コメントカードを回収して模擬授業者に渡す。また撮影した映像はDVDなどにコピーして模擬授業者に渡すとよい。ディスカッションでの問題提起、コメントカードでのクラスメートからのフィードバック、そして映像の振り返りなどを通して、改善案を作成する。１単位時間分の授業を１人の学生が担当するには多くの時間を要するので、グループによる模擬授業の実施も取り入れたい。グループで意見を出し合いながら授業計画・授業準備を行い、模擬授業においては１単位時間内の指導を分担して行う。

［２］英語科に関する専門的事項【20単位程度を想定】

１．英語コミュニケーション

【全体目標】

中学校及び高等学校において、生徒の理解の程度に応じた英語で授業を行うための英語運用能力を身に付ける。英語運用能力としては CEFR B2レベル以上を目標とする。また、生徒に対して理解可能な言語インプットを与え、生徒の理解を確かめながら英語でインタラクションを進めていく柔軟な調整能力を身に付ける。

【学習内容】

（１）聞くこと

到達目標：様々なジャンルや話題の英語を聞いて、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。

解説：言葉を聞いて理解するときには、読んで理解する場合と異なり、分からない箇所があっても、時間をかけて考えたり何度も聞き直したりすることはできないことが多い。瞬時に消えていく音声から情報や考えなどを理解するための十分な練習が必要である。また、多様な話者の音声的な特徴に慣れる機会を持つことが推奨される。

（２）読むこと

到達目標：様々なジャンルや話題の英語を読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。

解説：様々なジャンルや話題の英語を読んで理解する力を身に付ける。英文和訳に偏らずに、多様なリーディング活動を通して読解力を総合的に養うことが求められる。理解の正確さとともに、速度を高める練習も取り入れたい。また、多読指導などを通して「楽しんで読む」活動を取り入れることも推奨される。

（３）話すこと（やり取り・発表）

到達目標：様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと（やり取り・発表）ができる。

解説：様々な話題について英語で話す力を身に付ける。特に、中・高等学校の外国語科で扱う話題について正確かつ流暢に話すことのできる力を身に付けることが重要である。会話、議論、交渉のような双方向の「やり取り」と、スピーチのような一方向の「発表」の両方を取り入れることが求められる。また、事前準備のあるスピーチと即興で話す活動の両方を取り入れたい。

（４）書くこと

到達目標：様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。

解説：様々な話題について英語で書く力を身に付ける。特に、中・高等学校の外国語科で扱う話題について正確にかつ適切な速さで書くことのできる力を身に付けることが重要である。和文英訳に偏らず

に、まとまった長さのエッセイを書く活動などを取り入れることが求められる。また、「書くこと」においても、手紙、電子メール、SNS、チャットなどの双方向のやり取りを盛り込むことが望ましい。

（５）領域統合型の言語活動

到達目標：複数の領域を統合した言語活動を遂行することができる。

解説：５領域の学習においては、それぞれの領域を単独で指導するだけでなく、英語で理解した内容について、要約したり他者に説明したり他者とディスカッションしたりするなど、複数領域統合型の言語活動も取り入れることとする。

２．英語学

【全体目標】

中学校及び高等学校における外国語科の授業に資する英語学的知見を身に付ける。

【学習内容】

（１）英語の音声の仕組み

到達目標：英語の音声の仕組みについて理解している。

解説：英語音声の様々な特徴（音素、音変化、アクセント、リズム、イントネーション、綴りと発音の関係等）を理解するとともに、生徒に対する音声指導の際に役立てることができるように、学生自身がそれらの特徴を正しく音声化できるよう訓練する。日本語の音声との比較の視点も取り入れ、どのような違いがあるのかを理解することも重要である。

（２）英文法

到達目標：英語の文法について理解している。

解説：中・高等学校の英語担当教員は、指導すべき文法事項を的確に理解し、学習者の視点を常に意識した指導を行うことが求められる。中・高等学校で学んだ基礎的な英文法に関しても、知識が不正確であったり、生徒に正確かつ分かりやすく説明できなかったりすることも多い。英語担当教員として中・高等学校で英語を指導するための正確な文法知識を身に付ける必要がある。英語学の研究の成果による知見を得ることも重要である。日本語の文法との比較の視点も取り入れ、どのような違いがあるのかを理解させることも重要である。

（３）英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語

到達目標：英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している。

解説：英語の音声、文字、語彙、文法の歴史的変遷について基礎的な知識を得るとともに、英語圏及び世界で国際共通語として使われる英語の実態について理解する。

３．英語文学

【全体目標】

英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている国・地域の文化について理解し、中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる。

（１）文学作品における英語表現

到達目標：文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。

解説：英語で書かれた文学作品を読んで理解することを通して、読解力を向上させるとともに、多様な英語表現を学ぶことが求められる。さらに、中・高等学校における「読むこと」の教材として文学作品を利用する可能性を考えたり、文学作品を利用した教材作成をするなど、中・高等学校の英語科の授業に資する活動を取り入れることが推奨される。

（２）文学作品から見る多様な文化

到達目標：文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解している。

解説：英語で書かれた文学作品を読んで理解することを通して、それぞれの作品の時代的、社会的、文化的背景や、そこに描かれている人々の生活や価値観について学ぶとともに、多様な文化への理解を深めることが求められる。さらに、中・高等学校における「異文化理解」の教材として文学作品を利用する可能性を考えたり、文学作品を利用した教材作成をするなど、中・高等学校の英語科の授業に資する活動を取り入れることが推奨される。

（３）英語で書かれた代表的な文学

到達目標：英語で書かれた代表的な文学について理解している。

解説：英語で書かれた代表的な文学について、歴史的背景を含めて理解することが求められる。また、文学作品の鑑賞を通して、人間・自然・社会について洞察を深め、豊かな感受性を育むとともに、学んだ内容をもとにディスカッションをしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うことが推奨される。

４．異文化理解

【全体目標】

社会や世界との関わりの中で、他者とのコミュニケーションを行う力を育成する観点から、外国語やその背景にある文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題について学ぶ。併せて、英語が使われている国・地域の文化を通じて、英語による表現力への理解を深め、中学校及び高等学校における外国語科の授業に資する知見を身に付ける。

【学習内容】

（１）異文化コミュニケーション

到達目標：世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。

解説：英語は、イギリス、北米、オセアニアなどの英語圏だけでなく、世界で国際共通語として用いら

れている。国際共通語としての英語を用いた異文化コミュニケーション能力の育成は、グローバル化した現代社会の喫緊の課題である。中・高等学校の英語担当教員が生徒たちに異文化コミュニケーション能力を身に付けさせるためには、自ら世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を知ることが必要である。

（２）異文化交流

到達目標：多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。

解説：異文化コミュニケーション能力を身に付けるためには、座学だけではなく、様々な文化的背景を持った人々と実際に交流する機会を持つことが肝要である。長期・短期の留学が難しい場合でも、交換留学生、他大学の交換留学生、近隣に居住・勤務している外国人などとの交流を持つ機会を提供することが求められる。インターネットを利用して、テレビ会議、電子メール、SNSによるやり取りなどを行うことも考えられる。

（３）英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化

到達目標：英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している。

解説：言語を学ぶ際に、当該言語圏の文化を学ぶことは極めて重要であるが、国際共通語として用いられている英語の学習においては、英語圏をはじめ、英語が使われている様々な国・地域の歴史・社会・文化について理解することが求められる。中・高等学校の英語教育における教材の選択・作成・活用や異文化理解の指導に資する内容を選択して扱うことが求められる。

Ⅲ．小学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム 解説

【全体目標】

小学校における外国語活動・外国語科の授業を実施するための知識・技能・英語力を身に付ける。

教員の外国語教育の経験は、総合的な学習の時間での英語活動から中心的な役割を果たしてきた者から、担任する学年によって高学年で必修化された外国語活動にも全く関わってこなかった者まで多様であるため、次期学習指導要領に対応するために平準化が必要であり、教員研修が果たす役割は大きい。子どもの変容を実感することが教員の動機付けにつながるという研究結果もあり、子どもの変容を引き出すような指導力を身に付けることは喫緊の課題である。コア・カリキュラムは指導に必要な知識・技能、英語力、授業研究の３つの領域について扱う項目と到達目標を、「基礎」「発展」「推進」の段階に対応して示す。英語力については、外部資格検定試験等の指標は提示せず、授業に必要な英語力を段階ごとに示す。

【研修内容】

１．指導に必要な知識・技能

学習指導要領及び子どもの第二言語習得の特徴に根差した授業を実現するために必要な指導力を身に付ける。単なる反復練習や音声の暗記に終始しない授業を作るためには相応の指導技術が不可欠であり、今までの外国語活動の指導経験のうち継承できる部分を継承しつつ、新たに必要な知識・技能を身に付けることが求められる。基礎段階では授業と密接に関わる部分を扱い、発展・推進段階では英語に関する知識や小・中・高連携など、より広い内容を扱う。校内研修が実効性をもって機能することが特に期待され、研修を担当できる講師の育成が急務である。

◇一般目標

小学校における外国語活動・外国語の指導に必要な知識・技能を身に付ける。

◇研修項目

①学習指導要領

到達目標：外国語活動・外国語、中・高等学校の外国語科の目標・内容を理解している。

解説：中学年で外国語活動、高学年で外国語と、小学校教育課程の中で位置づけが異なっている。それぞれの目標・内容を的確に理解することの必要性は、他教科に比して大きいといえる。さらに、学習指導要領が改訂されるたびに教育課程内での位置づけが変わっているのも外国語教育の大きな特徴であり、特に経験年数の少ない教員はこうした事情について理解する機会を研修でつくる必要がある。外国語単独の研修を企画するのが困難な場合は、教育課程に関わる研修等で外国語教育に特化したセクシ

ョンを設けるなど、実効性のある工夫が期待される。

②主教材

到達目標：主教材の趣旨・特徴・構成、効果的な使用方法を理解し、実践に生かすことができる。

解説：中学年では、文部科学省が作成する教材例が示され、多くの学校で使用されると考えられる。高学年では平成 30・31 年度は文部科学省が作成した新教材（児童用冊子、教室用デジタル教材、年間指導計画例、学習指導案などを含む教師用指導書）が、平成 32 年度からは検定教科書が使用される。多くの場合、こうした主教材が年間指導計画に密接に関わることが想定され、各主教材の構成、指導順序、提示される活動のねらい等について深い理解が求められる。また、主教材に付属するデジタル教材等を効果的に使用するために、その操作に慣れるための研修の必要性も高い。

③子どもの第二言語習得についての知識とその活用

到達目標：子どもの第二言語の学び方の特徴について理解し、指導に生かすことができる。

解説：子どもは使うことを通してことばを身に付けることを深く理解し、意味のあるやり取りの重要性を理解する。単なる反復練習による音声暗記や言葉を粗末に扱いかねないゲーム性の高すぎる活動にならないよう留意する。音声に対して敏感な時期であり、質の高いインプットを与える重要性を理解する。そのために、教材や外部人材等を活用する方法を身に付ける。また言語習得の過程が、音声から文字、受信から発信の順であることを理解し、音声による受信経験があとに続く音声での発信や文字での受信・発信の土台であることを反映した指導を行うことが求められる。国語教育と関連付けながら、ことばそのものへの気づきを高め、ことばの豊かさ・大切さが実感できる授業づくりを目指す。

④英語での語りかけ方

到達目標：児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。

解説：音声によるインプットの果たす役割が大きい中、指導者が効果的に英語で児童に語りかけられることが非常に重要である。英語に自信がない教員でも、ことばを使い合う気持ちを忘れず、丁寧に心を込めてフルセンテンス（完全な文）で、その授業で中心となる英語表現を語りかける技術を身に付けることを目指す。自信のなさが声の弱さに現れる傾向が見受けられるので、クラスルーム・イングリッシュを含めて、今日使う英語表現については十分練習し、児童にきちんと届く発声をすることが肝心である。

⑤児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方

到達目標：効果的に児童の英語での発話を引き出し、円滑にやり取りを進めることができる。

解説：使うことを通してことばを身に付ける子どもの学びの特徴に寄り添い、やり取りすることを通して児童から発話を引き出す技術を身に付ける。子どもが反応したくなる働きかけをし、反応を引き出す。その反応は日本語や不完全な英語である場合も多いが、その意味を受け止め、適切な英語に言い直して返すというやり取りを大切にする。英語学習というと、指導者の手本を繰り返すものととらえがちだが、そこには情報の授受はなく、音声の反復があるだけである。情報の授受を伴う意味のあるやり取りを積み重ねることを通して、学習者自身が主体的に意味内容とそれに対応する音声を結び付ける深

い学びにつながる。

⑥文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方

到達目標：効果的に音声言語から文字言語へ発展させ、読む活動及び書く活動へ導くことができる。

解説：外国語活動で大文字・小文字にふれた子どもたちが、外国語科で読み・書きにもふれることになる。文字は音声を書き留めているものであることを念頭におき、過度の文字指導が先行しないことが重要であることを、文字ありきの学習経験を持つ教師は強く意識することが求められる。アルファベットの指導だけ考えても、文字の名前と形の一致、形と音の一致、大文字と小文字の組み合わせ、順序の理解などいくつもの事項がある。蓄えた音声と文字を一致させる経験を重視し、少しずつ読み方や意味を類推しながら読みへとつなげてゆく。書く活動においては、なぞる、写す、空所のみ書くなど細かいステップを踏んでゆく。児童の文字獲得のプロセスは多様であることを理解し、適切に指導する。

⑦題材の選定、教材研究

到達目標：児童の発達段階・興味関心にあった題材を選定し、教材研究ができる。

解説：意味のあるやり取りを実現するためには、子どもたちの興味関心に合致した題材選びは欠かせない。授業で扱う語彙や英語表現が意味を伴って子どもに迫るために、適切な題材を選定する。そのためには児童理解が不可欠である。教材については、子どもたちの理解を助けたり、音声や文字を提供したりする役割があることを理解する。特に絵本には、それ自体に文脈があり、繰り返しの表現の多い絵本を効果的に教材として使うことの意義は大きい。音声教材については、英語らしい音の流れに合ったものを研究し、インプットの質と量を高める。

⑧学習到達目標、指導計画（１時間の授業づくり、単元計画・学習指導案）

到達目標：単元計画を立て、学習指導案を書くことができる。

解説：指導の根幹をなす部分である。子どもの実態に合わせて単元の目標を適切に設定することの重要性を理解し、単元計画を立てる。その際、受信から発信、音声から文字の順序を重視する。１時間の授業の計画にあたっては、授業のねらいに合わせて活動を効果的に組み合わせる。子ども同士でのやり取りを行う際は、事前に十分なインプットを与え、児童一人ひとりがある程度発話できることを確認した上で行い、児童の学ぶ過程を把握できるよう、活動の形態に留意する。授業のねらいに合わせて適切に評価する場面を設定する。こうした授業計画を学習指導案の形にまとめる際には、英語の誤りがないことにも配慮することが重要である。

⑨ALT 等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方

到達目標：ALT 等とのティーム・ティーチングの中で担任の果たす役割を理解し、実践できる。

解説：単独での指導のみならず、ティーム・ティーチングの機会が多く、雇用形態によって活用の仕方が多様であるのも外国語活動・外国語の特徴である。ティーム・ティーチングでは、児童を把握している学級担任がＴ１をすることが重要である。指導者に必要なのは英語力だけではないことを理解し、授業計画・実施に責任をもってあたることが求められる。インプットの質と量を確保するために外部人材を十分活用し、せっかくの英語でのインプットを日本語に逐一訳してしまうことがないよう留意する。

⑩ICT 等の活用の仕方

到達目標：ICT 等を有効に活用できる。

解説：小学校外国語教育と ICT は親和性が高いという認識があり、『Hi, friends!』のデジタル教材など日常的に活用されている教材も多い。反面、ICT に苦手意識を持つ教員もいることから、実物投影機など操作が比較的容易な機器から使い始めることが有効である。ICT 教材には、インプットの質と量を補ったり、意味と音を結び付けたりする役割が期待される。子どもが身に付けても困らない音源を選定する力も肝要である。また、文字指導や読み・書きの領域については、国語教材と共通する部分もあり、有効な活用法を工夫していくことが求められる。

⑪学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）

到達目標：学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）について理解し、適切に評価できる。

解説：小学校外国語活動（中学年）及び教科としての外国語（高学年）における評価について、なぜ評価するのか、何を評価するか、どのように評価するのかについて理解する。次期学習指導要領に示された５つの領域に関わる目標とその評価の在り方、小学校の発達段階に適したパフォーマンス評価を含む多様な評価の方法、小学校から中学校・高等学校まで見通した具体的な領域別の目標とその基本的な考え方、指導と評価の一体化等について、実際の授業と結び付けながら扱うことが重要である。

⑫小・中・高等学校の連携と小学校の役割

到達目標：小・中・高等学校の連携の在り方、小学校の果たす役割を理解し、指導に生かすことができる。

解説：英語教育改革の一翼をになうには小学校での外国語教育の在りようについて理解するだけでは不十分であり、中・高等学校の目標について理解し、小学校が果たすべき役割を明確に捉えることが必要である。外国語教育を 10 年間の営みとして広い視野で見ることで、小学校でなければできないことは何か、中・高等学校に任せてよい部分はどこか、明確にすることができる。10 年のスパンで捉えることで、小学校でのある種の「完成」を意識することなく、子どもの実態に合わせた目標設定を行うことが期待される。

⑬指導計画（年間指導計画・短時間学習）

到達目標：カリキュラム・マネジメントについて理解し、年間指導計画及び効果的な短時間学習の計画を立てることができる。

解説：外国語の指導経験が浅い時期には、目の前の授業や単元に取り組むことが課題となるが、経験が豊かになるにつれ、年間の指導計画を見通して子どもの成長を支える視点を持つことが必要である。特に子どもの実態に合わせて、どの技能を取り入れたり重点を置いたりするか、年間を通して計画を立て柔軟に修正することが期待される。短時間学習については、その時間が単なるゲームやドリルの時間に終わることなく、45 分の授業と相互補完しつつ単元目標の達成に確実に寄与する計画を立てる力を身に付ける。

⑭英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）

到達目標：英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）を理解し、指導に生かすことができる。

解説：大学卒業後の教員の英語経験には大きな個人差があり、海外旅行等で楽しみながら使っているケースや全く英語とは絶縁状態にあるケースなど多様である。また英語学習に対して、決してよい思い出がある教員ばかりではない。中学年の外国語活動、高学年の外国語の導入を機に、指導に必要な英語力をつけるため、改めて英語を学び直す機会ととらえ、子どもの学習を支える専門知識を身に付けることが期待される。児童は音声に対し柔軟に対応できることから、英語らしい音の流れの重要性を理解し、指導や教材の選択に生かす必要がある。語彙については、子どもの日常生活に根差した語彙について知識を深める。子どもの音声や文字による発信に対し、その正誤を判断したり、正しく言い直したり、正しい書き方を示したりするために、文法や正書法について理解を深める。文字言語にふれる前は、子どもが経験する文法は音声に宿ることを理解し音声によるインプットの質保証に努める。

⑮第二言語習得に関する基本的な知識

到達目標：第二言語習得に関する基本的な事柄を理解し、指導に生かすことができる。

解説：子どもの第二言語習得について基礎段階で触れたのち、広く第二言語習得に関する基本的な知識を得ることで、日々の実践をより多角的にとらえることにつなげる。第二言語習得についての主だった理論や、指導法の変遷について知見を深めることを通して、自身の実践が、習慣形成の要素が強いのか、インタラクションを重視しているのか等、外国語教育の流れの中でどのように位置づけられるのかを認識する機会となる。こうして自身の実践を客観視することで授業改善につながることが期待される。

⑯児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）

到達目標：児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）について理解し、唱えたり歌ったりできる。

解説：絵本や歌は、実際に教材として活用できる。繰り返しの多い物語展開や、音調の整った絵本は授業でも活用しやすい。歌は英語らしい音の流れを表しており、音声教材としても有用である。絵本を音読したりや歌を歌ったりすることを通して教員の音声面での英語力・表現力を向上させることが期待される。また、絵本や歌を通して様々な文化を扱うことも可能であり、より深い授業実践に結び付けることができる。教材としての絵本や歌は、音源のついたものも市販されており、効果的に活用することで教員の負担を増やすことなく、インプットの質と量の向上が期待される。

⑰異文化理解

到達目標：異文化理解に関する基本的な事柄を理解している。

解説：児童が、様々な国や地域の子どもたちがどのような思いでこの同じ地球上で生活しているのかを知ることは「世界とどう関わるか」を考える素地を育む上で不可欠であることを理解する。こうした視点を題材や教材の選定に反映させることが重要である。自国の言語や文化と同様に異言語や異文化を尊重し、相互依存の関係や地球的な課題について考える機会を与える必要がある。

⑱児童や学校の多様性への対応

到達目標：児童や学校の多様性について理解し、適切に対応することができる。

解説：近年、さまざまな特徴や傾向をもった児童が通常学級に在籍している。外国語活動・外国語の指導にあたっては、活動で過剰な興奮状態にならぬよう、友達との関わりが希薄にならぬように全体指導の中で見守る必要がある。また、一時間の見通しを授業前に伝えておくなどの個別配慮も有効である。また、学級の人数が少ない場合は、少人数指導、複式の指導プログラム等の効果的な指導方法を開発・実施する必要がある。

２．英語力

多くの教員が英語に対して自信があるわけではない中で授業を行うことになる。単に英語力向上を目指すのではなく、授業を行うために必要な英語運用能力を向上させることを目指す。教師が英語を学ぶこと自体を楽しんでいる姿は子どもにも英語を学ぶ動機付けにつながると考えられる。英語力は一朝一夕に伸びるものではないため、数回の研修で大きな効果を上げることは容易ではない。研修の中で、日常的に個人や学校で取り組める英語力向上の方法を紹介するなど工夫する。基礎段階では授業を行うための核となる英語力を目指す。発展段階では表現の幅を広げ自信を持って使うことを目指す。推進段階では、創造的で即興的な英語力を目指す。

◇一般目標

小学校における外国語活動・外国語の指導に必要な英語力を身に付ける。

◇研修項目

①授業で扱う主たる英語表現の正しい運用

到達目標：授業で扱う主たる英語表現を正しく話すことができる。

解説：英語に自信が持てない教員にとって、とっさに言いたいことを英語で話すことは容易なことではなく、かといって片言の英単語を聞かせていたのでは、子どもが受けるインプットの質保証が困難になる。英語に自信がない教員でも、授業で扱う主たる英語表現や語彙を中心に英語を使ってみることで、インプットの質を維持しやすくなる。また、同じ表現を授業中に繰り返し使うことで、自信が出てくる。丁寧に英語表現を話す練習や、きちんと子どもに届く声で話す練習を行う。

②発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した発話

到達目標：発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した発話ができる。

解説：自身の発音の特徴を知り、改善するべく練習する。リズム・イントネーションが崩れると理解されることが困難になるので、文のどこを強く言うか、また弱く言うか、意識して発話する。例えばWh 疑問文の文末は、「(何) ですか～？」という気持ちが強いとつい上げてしまうことが多いが、通常下げる必要がある。また、片仮名で親しんでいる guitar や orange は、英語ではストレスの位置が日本語とは異なっており、馴染んでいる語ほど辞書等で確認する習慣を付けることが望ましい。

③板書や提示物における英語の正しい表記

到達目標：板書や提示物を正しい英語で書ける。

解説：アルファベットの形や大文字・小文字の使い分けなど、頭では分かっていても書くと間違えてしまうことがあるが、目から入るインプットとして正確なものを提示することの重要性を理解し、正しい表記ができるよう意識を高める。

④ALT 等と授業について打ち合わせをするための表現

到達目標：ALT 等と授業について英語で打ち合わせできる。

解説：ALT との打ち合わせで伝えるべきことは、ある程度パターン化されている。そのパターンに合った英語表現のレパートリーを少しずつ増やしていく姿勢を持つことが期待される。日本語が堪能な ALT の場合、日本語で打ち合わせをすることもできるが、自身の英語の練習のつもりで英語を使い慣れる機会と捉えることもできる。授業中に ALT とのやり取りができる場合には、「児童はこの語彙の意味が分かっていない」など必要な表現のレパートリーを増やすことも有効である。

⑤クラスルーム・イングリッシュを土台にした意味のあるやり取り

到達目標：クラスルーム・イングリッシュを土台に、児童と意味のあるやり取りができる。

解説：授業を進行するために必要な “Sit down.” “Stand up.” などの短い指示を英語で行うことを通して、少しずつ英語に対する自信が深まる。そのレパートリーを増やしつつ、一方的な指示や形式的なやり取りに留まらず、子どもとの意味のあるやり取りへと教師の英語力を向上させていくことが重要である。決まり文句だけでは新たな意味内容を伝え合うことには限界があるが、英語への苦手意識を薄める効果があることを理解し、柔軟に英語力向上のための一手段として取り入れる。

⑥児童の発話や行動に対する適切な言い直し

到達目標：児童の発話や行動に対して、正しい発話に導くために適切な言い直しができる。

解説：使うことを通して言語を習得する子どもの学び方の特徴に合わせ、児童の発話の誤りを、やり取りの中で適切な言い直しを聞かせることで修正に導く。そのために、児童の意図したことを受け止め、適切に言い直して聴かせる技術と英語力が必要である。研修参加者同士でも役割を決めて練習することが可能である。

⑦児童の理解に合わせた適切な言い換え

到達目標：児童の理解を促すために適切な言い換えができる。

解説：指導者が、英語のレベルを意識せずに語りかけると、児童には理解不能な場合がある。こうした状況では、児童が理解していないことを鋭く察知し、目の前にいる児童が理解できる表現や語彙を瞬時に判断して言い換える指導技術と英語力が必要である。指導者の適切な言い換えにより、児童は英語を分かった経験を積むことができ、学習意欲が高まることが期待される。授業中に児童に英語が通じなかった場面を集約し、言い換えを練習する等研修の方法に工夫が必要である。

⑧児童の発話や行動に対する即興的な反応

到達目標：児童の発話や行動を共感的に受け止めたり、さらにやり取りを進めたりするために、即興的に英語で反応できる。

解説：言いたいことがパッと英語で言える段階であり、かなり高い英語運用能力が要求される。さらに、それを児童に理解できるよう調整して聞かせる必要があり、単に英語力があればよいのではない。児童の聴解力を的確に判断することも求められる。

３．授業研究

授業研究は小学校の文化に根差しており、研修の場として活用することが期待される。様々な方法で優れた授業を参観したり、自身の実践を公開することの重要性は高く、特に実際の授業を参観したりされたりすることは児童の様子を間近で観察したり、より広く自身では見落としている点に気づいたりする機会となる。また異校種の授業を参観することで、小・中・高等学校の連携を実感することが期待される。基礎的な段階では自身の指導力向上を主眼に置く。発展段階では、授業を分析しより多角的に授業を見る力を養う。推進段階では、組織的な研修の場を企画運営する役割が期待される。

◇一般目標

授業研究を通して小学校における外国語活動・外国語の指導に必要な指導力を向上させる。

◇研修項目

①授業観察（中学校の授業参観も含む）

到達目標：

基礎：明確な視点を持って授業を観察し、指導に生かすことができる。

発展：授業を観察することを通して、授業者の指導理念や児童の学習を促進・遅滞させている要因を分析できる。

解説：外国語活動・外国語や異校種の外国語科の授業を参観することを通して、自らの授業をふりかえり新たな知見を得られることは、他教科と同様である。授業の表層的な部分だけでなく、通底する授業者の指導理念や、児童の反応の裏にひそむ様々な要因を見抜く力を磨く。小学校の外国語の授業というと盛り上がりや児童の面白い反応にばかり目が行きがちになるが、深い思慮をもって観察することが求められる。

②授業公開

到達目標：

基礎：授業を公開することを通して自身の指導力・英語力の課題を発見し次の指導に生かすことができる。

発展：授業を公開することを通して効果的な指導法や教材を示し、広めることができる。

解説：校内での非公式の授業公開や全国規模の研究発表など、多様な機会がある。自身の授業を公開し参観者からのコメントによって、自分では気づかない指導上・英語運用上の留意点や、子どもの反応に対する解釈、より効果的な教材や指導上の工夫点について気づくことができる。課題が意識されている

場合は、その点を参観者に伝えるなどして、参観のポイントを示すことも有効である。校内や地区での立場によっては、指導法や教材について実際に使われているところを参観者がイメージすることを意図した授業公開を行う。

③公開授業等の企画・運営

到達目標：

推進：学校や地域の課題や進むべき方向性を的確に判断し、効果的に公開授業等の企画・運営ができる。

解説：学校や地域特有の課題やそこに所属する教員の課題を的確に認識し、公開授業のテーマや実際の内容について企画し運営することが期待される。公開授業や研究会の規模によっては、教育委員会と密接に連絡を取り、協力体制を作りながら企画・運営にあたる。

④モデルとなる授業

到達目標：

推進：学習指導要領の趣旨や子どもの第二言語習得の特徴を反映した授業を行い、他の教員に対しモデルを示す。

解説：若手教員や、外国語活動・外国語の授業経験が浅い教員を対象に、あるべき授業の姿を見せる。参観者は、どのように題材を選び、活動を練り、インプットを与え、やり取りしながら発話を引き出すのかを実際に参観することで、考え方と実践の融合を経験できる。授業後に参観者から質問を受けたり、授業者の意図について説明したりする機会を持つことで、より深い理解へとつながり、また誤解を正すことができる。

【効果的な運用のための手立て】

①教育委員会と大学の協働

教育委員会と大学が講師の派遣や研修プログラム作成で協働することを通して、養成・採用・研修を通して成長し続ける教師を支えることができる。提携を結んだり、大学での研修講座を出張扱いにしたりするなど実質的な工夫が求められる。

②管理職 ALT 研修

教員の研修が成果を上げるためには管理職が研修の必要性を深く理解している必要がある。管理職を対象にした研修で外国語教育を扱うことは検討に値する。また、教員研修が充実しても一層活用される外部人材の研修がなおざりになっていては、英語教育改革が成果を上げることは期待できない。外部人材の採用・研修については責任を持って当たることが必要である。

③校内研修

自治体の悉皆研修で外国語教育を扱うのが困難な場合、校内研修が実質的には多くの教員が参加できる研修形態であり、その充実なくして外国語教育の成果を上げるのは困難である。事例を参考に、各校で実施可能な方法で校内研修を充実させることが期待される。

④メンターの育成

適切な研修が行える講師の数が不足しているという指摘がある。推進リーダーや中核教員を中心に、メンターの役割を果たせる人材の育成、専門的な知見を持った大学教員等との連携が求められる。多くの教員が授業を行うことで裾野が広がり、幅広い層から研修を担当できる人材が育つことが期待される。また、教育委員会と地区の教科等研究会の連携によって、研修の計画がより有機的に機能することが期待される。

⑤オンライン研修

多忙を極める教員が自主的に研修を行うためには、オンライン等の時間に縛られない研修は一考に値する。複数の自治体が連携してプログラムを開発するなど、負担を分け合う工夫も必要である。

⑥海外研修

一定期間、教員が海外に滞在して実際に英語を使う経験をしたり、英語の指導法について学んだりすることは有効である。自治体の実態に合わせて実施の可能性を探ることが薦められる。

⑦英語力向上

英語力は一朝一夕には向上しない。研修以外の場で個人が無理なく学べる方法を提案したり、学校全体で短時間の取り組みを継続することが推奨される。

Ⅳ．中・高等学校教員研修 外国語（英語）コア・カリキュラム 解説

【全体目標】

中学校及び高等学校における外国語（英語）の学習・指導・評価に関する専門的知識と、授業指導のための技術や英語力を身に付け、教員として成長を続けていく。

教職に就いた教員がキャリアを積みながら専門性を向上させ、成長し続けるためには、研究と修養に努める必要がある。研修では「指導に必要な知識・技能（指導技術・授業づくり・専門知識）」を得ることで指導力を高め、英語を指導していく上で必要となる英語力を向上させることを目標とする。コア・カリキュラムでは、英語教員としてのキャリアを積んでいくなかで、指導力・英語力を向上させ、教員として成長し続けるために、「１～３年目」「４～９年目」「10年目以降」のキャリアステージに応じた目標を設定し、それぞれのステージにおいて特に重要と考えられる研修項目を示す。

◇キャリアステージに応じた目標

教職１～３年目

生徒の現状や学校の特性・特色等に応じた授業を実施するための英語力・指導力を習得する。

教職４～９年目

英語力・指導力を計画的・継続的に向上させる。また、授業公開を含む校内研修等において中心的役割を担うとともに、校内外との連携・協働を深める。

教職10年目以降

高度な英語力・指導力の習得に努めるとともに、メンターとして若手教員等を指導しながら、自らも成長を続けていく。

【研修内容】

１．指導技術

英語の指導技術は講義を聞いて理解するだけでは不十分である。必ず研修の中で参加者が実際に指導の実演をすることにより、指導技術を獲得していくことが重要である。研修内での実演を映像として記録し、研修後もその映像等を通して振り返りの機会を持つなど、自らの指導技術における課題を明らかにすることが必要となる。中堅以上の教員に関しては、若手教員等に対し、指導技術の指導を行う体験を通して、自らの指導技術を向上させる。

◇一般目標

中・高等学校における英語の指導に必要な指導技術を実演を通して身に付ける。

◇研修項目

①５つの領域別の目標に基づく指導

到達目標：５つの領域の指導技術を実演を通して学び、授業指導の中で効果的に使用することができる。

解説：次期学習指導要領において示される「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」及び「書くこと」の５つの領域の具体的な指導技術を学ぶとともに留意すべき点を理解し、研修の中で実際に各領域の指導実演をし、他者からフィードバックを受け、振り返る機会とする。研修においては、指導者が講義などで一方的に知識を与えるのではなく、研修受講者に生徒の実態を想起させながら、各領域に習熟する際の困難点やその原因についてグループ討議等を通して考えさせたり、受講者に生徒の立場で各領域を用いる様々な活動を実際に体験させ、その体験を振り返らせたりすることで理解を深める工夫をする。また、実際のコミュニケーションの場面に鑑み、各領域を独立して扱うだけでなく、複数の領域を統合させた言語活動を教員の立場で実際に指導実演するとともに、生徒の立場で体験できる場を設定する。授業づくりにおいては、最初に指導方法ありきではなく、「生徒が英語を使って何ができるようになるか」や「生徒がどのように学ぶか」が重要であることを常に意識させるようにしたい。

②音声指導

到達目標：日本人英語学習者の音声によるコミュニケーションを阻害する発音の諸要素等について実演を通して理解し、生徒の実態に即した的確な授業指導ができる。

解説：日本人英語学習者にとって、コミュニケーションを阻害する原因となっている発音の諸要素（音素、強勢、リズム、イントネーションなど）や音のつながり等を理解し、それらを克服させるために指導法の実演を通して学ぶ。特に、生徒の発音等がコミュニケーションに支障をきたすような場合、どのように指導すればよいのかを理解し、教室での指導に生かすことができることが重要である。発音のスキルを向上させる指導は、リスニングにおける音声知覚の力を向上させる指導とも結び付く。

③語彙・表現指導

到達目標：語彙・表現に関する指導について実演を通して理解し、生徒の実態に即した的確な授業指導ができる。

解説：語彙・表現を知っているということは、その形式・意味・使用という３つの側面から知っていることだと理解させる。その上で語彙・表現の学習には意図的なものと偶発的なものがあること、生徒が学ぶ語彙を受容語彙と発表語彙のどちらとして扱うのかにより、指導法も異なってくることを理解させる。また、語彙の導入や定着のための様々な活動を、生徒の立場で実際に体験することが重要である。さらに、生徒が語彙・表現を自律的に学ぶ手段となる辞書についても、どのように使用させるのかについて、具体的な指導方法を理解しておく必要がある。

④文法指導

到達目標：コミュニケーションを支える文法の指導について実演を通して理解し、生徒の実態に即した的確な授業指導ができる。

解説：文法がコミュニケーションを支えるものであることを実感できる演習などを体験することにより、文法の習得が５つの領域を通して円滑にコミュニケーションを図るための基盤となるものであることを理解する。その際、文法事項をある程度のまとまりをもって整理したり、系統的な指導をしたりするなど文法指導上の工夫点を学ぶ。その上で、当該文法事項が実際のコミュニケーションの場面（言語の使用場面や言語の働き、コミュニケーションの目的・場面・状況等）を意識した言語活動において活用できるよう、協議や演習を通して体験することが重要である。

⑤英語でのインタラクション（ティーチャー・トークを含む）

到達目標：授業において生徒の英語力等に応じた的確なティーチャー・トークができるとともに、生徒の英語習得を促進するような英語でのやり取りをすることができる。

解説：高等学校学習指導要領における「授業は英語で行うことを基本とする」とは、単に教員が英語で授業を行えばよい、ということではない。生徒が英語による言語活動を行うことを授業の基本とし、教員はファシリテーターとして、生徒の主体的な英語によるやり取りの機会を増やす必要がある。その際、生徒となるべく多くやり取りをしながら授業を進められるように、生徒の英語力や発言内容に合わせて教員が用いる語彙・表現や話す速度などを適宜調整できるよう、ティーチャー・トークの技術を身に付ける必要がある。また、生徒の発話における文法的な誤りや意味が伝わらない恐れのあるものを、さりげなく正しい表現で言い換える（リキャスト）指導が必要であり、そのための英語力が教員に求められる。研修では、教員役と生徒役に分かれ、英語でのインタラクションを中心とした模擬授業を行うことなどが考えられる。

⑥若手教員等への指導技術の指導

到達目標：若手教員等へ指導技術を指導することにより、自らの指導技術を振り返り、その技術を一層高めることができる。

解説：中堅以上の教員は、若手教員等に対して、英語授業で必要となる様々な指導技術の指導を積極的に行うべきである。これらの指導を行うことで、自分自身の指導技術を振り返り、指導技術をより一層高めるためのよい動機付けとなることが期待される。

２．授業づくり

日々の授業を漫然とこなすのではなく、学習到達目標に基づいた指導計画の作成や授業実践を行うとともに、自らの授業指導を振り返る機会を継続的に得ながら、授業改善の仕方についても研修によって学び、実践していくことが重要である。また、生徒の自律的な学びを促進するような振り返りのさせ方や、ティーム・ティーチングのような指導形態における授業の在り方、教材研究やICT等の活用、パフォーマンス評価を含む５つの領域の総合的な評価方法を実演を通して学ぶことにより、授業づくりをより大きな視点で考察し、実践できるようになる。

◇一般目標

生徒の実態を的確に把握し、その理解に基づいた授業づくりや授業改善をするための研修を通し英語教員として成長していく方法を身に付ける。

①アクション・リサーチなどに基づく授業改善

到達目標：授業改善のための方法について理解し、実際に授業改善に取り組むことができる。

解説：教員として成長し、授業を改善していくためには、自らの授業指導を振り返る機会を継続的に得ることが非常に重要である。振り返りの手段として、観察や面接、授業記録による事例研究や、学習者による学習日誌がある。これら以外にも、教員が自らの指導力を向上させながら授業改善を進めるための効果的な手法の一つとして、アクション・リサーチがある。アクション・リサーチとは、日々の授業において、目の前にいる生徒を意識的・多面的に観察・評価することで課題を明確にし、自己の指導法の修正を繰り返しながら目標の達成を目指す実践的研究法である。アクション・リサーチのプロセスは、以下のようになる。

1）問題の発見：直面している事態から問題を焦点化する。
2）事前調査：選んだ問題点に関する実態を調査する。
3）リサーチ・クエスチョンの設定：調査結果から研究を方向づける。
4）仮説の設定：方向性に沿って、具体的な問題解決の対策を立てる。
5）計画の実践：対策を実践し、経過を記録する。
6）結果の検証：対策の効果を検証し、必要に応じて対策を変更する。
7）報告：実践を振り返り、その時点でのまとめを行い、報告する。

研修を通して、アクション・リサーチの理論と実践を学び、その手法を身に付けることにより、中・長期的に生徒と向き合いながら指導力を向上させ、自律的に授業改善を進めていく力を育成することができる。さらに、転勤などによって指導環境が変化したとしても、その環境の中で日常的に授業改善に向けて研鑽を積む資質を修得することが可能となる。また、授業改善に向けた取組は、教員個々の力量に頼るのではなく、学校全体としての取組となることが重要である。アクション・リサーチは、こうした研修・研究を進めるための共通言語となり得る。

なお、アクション・リサーチによる研修を進めるためには、的確な助言をする「メンター」の役割が重要となる。メンターは、メンティーのニーズに応じて適切な研修計画を立て、あらゆる段階で支援し助言することが必要である。実際には指導主事がメンターとなることが多いと想定されるが、指導主事は指導経験の豊かな人が多いので、それに加えてメンターとしての研修の機会を保証すれば、経年研修はより効果的になることが期待できる。さらに、アクション・リサーチを体験した教員が、次にアクション・リサーチをする人のメンターとなるような形でメンターを育成していくことも将来的な展望の中で想定していきたい。例えば、「５年経験者研修」と「15年経験者研修」を行う自治体では、15年経験者が５年経験者のアクション・リサーチのメンターとなるように研修体制を組むこともできるであろう。

②領域別の学習到達目標の設定と改善

到達目標：領域別の学習到達目標の設定の仕方を理解し、目標の達成状況から自らの指導と評価の改善のための視点を養うことができる。

解説：英語の授業が生徒の総合的なコミュニケーション能力の育成を目指したものであることを踏まえ、卒業時の学習到達目標及びそれを段階的に実現するための学年ごとの目標を、学習指導要領に基づきながら５つの領域別に「（英語を使って）～することができる」という能力記述文を用いて作成する。このことを通じて、生徒に身に付けさせる能力を明確に意識した指導計画を作成したり、自らの指導と評価を改善したりするために必要な基本的視点を養う。

その上で、学習指導要領及び学習到達目標を踏まえて年間の指導・評価計画や単元の指導・評価計画を作成する研修や、各単元の目標実現に資する効果的な言語活動を設定したり、単元の目標の到達度の測定に適した評価方法を検討したりする研修を行うことが考えられる。また、各目標の達成状況を把握することでよりよい指導や評価方法を検討すると同時に、目標の妥当性を検証することで修正案を検討することも想定される。

③学習到達目標に基づく年間指導計画・単元計画の作成

到達目標：勤務校の生徒の実態に即した学習到達目標に基づいて、年間指導計画・単元計画を作成することができる。

解説：教職に就いてしばらくの間は、勤務校で既に設定されている学習到達目標に沿って授業を行う場合が多いが、その後はより自律した英語担当教員として、勤務校の学校教育目標も見据え、広い視点から教科指導のための枠組み等を同僚に対して提案ができるような力が必要となってくる。したがって、研修において、学習指導要領を踏まえながら学習到達目標に基づく年間指導計画・単元計画などの具体的な作成方法等を学ぶことにより、生徒の学習が目標達成に向けて効率的に進んでいくためのマクロな視点を養うことができる。

④授業の組み立て

到達目標：学習到達目標に基づく授業の組み立て方について理解し、生徒の実態に即して授業を組み立てることができる。

解説：学習到達目標や扱う単元のテーマを理解した上で、授業をいかに組み立てるかを考察する。様々な組み立て方が可能であるが、教員同士の話し合いを通して、生徒が学習到達目標を実現するためにはどのような授業の組み立て方が効果的なのかを考えさせたい。また、各授業は、長期的目標である学習到達目標のどの部分の力を養うことに寄与するものであるかを考えて組み立てることも意識できる必要がある。

⑤学習指導案の作成

到達目標：生徒の実態に即した授業指導の目標・手順、評価の観点・方法などを系統立てて記述した学習指導案を作成することができる。

解説：教員が頭の中で組み立てた授業の構想を学習指導案という具体的な形にすることで、授業のねらいや指導手順、評価方法などが妥当であるかどうか、教員が自分自身で客観的に考察するよい機会となる。経験年数の少ない教職１～３年目の教員にとっては特に有益である。略案と細案、英語による学習指導案と日本語による学習指導案など、様々な書式のものを作成できるようにしておくべきである。

⑥教科用図書を活用した授業

到達目標：教科用図書の構成や内容を理解し、授業指導において、生徒の実態に即して的確に活用できる。

解説：学習指導要領に基づいて作成されている教科用図書（教科書）を、教える立場から十分に読み込み、その構成や内容について深く考察しておくことは、生徒の実態に即した学習到達目標に基づく指導計画を立て、効果的な授業指導を行う上で非常に重要である。教科用図書には各単元の本文や言語活動例以外にも、授業を運営する上で必要となる基本的なクラスルーム・イングリッシュを紹介するページや、言語の使用場面や働きに応じた英語表現、生徒の興味・関心を喚起する英語の歌やコラム記事など、様々な情報が掲載されている。これらの活用方法を研修において学ぶことで、授業をより活性化することができる。

⑦生徒による学習の振り返り

到達目標：生徒を自律した学習者として育成するための手立てを理解し、生徒の実態に即した学習の振り返りをさせることができる。

解説：生徒が授業を通して「何を学び、何ができるようになったか」を振り返ることは、生徒を自律した学習者として育むために重要なことである。生徒が適切に振り返りをするためには、各単元のゴールとなる活動や、その実現のための各授業の目標が明確に設定され、生徒に提示されることが必要である。そのための目標、指導及び評価の一連の流れを意識した授業づくりや、目標を踏まえた振り返りシートの作成にあたっての指導方法などを演習等により学ぶことが考えられる。また、長期的なスパンでの振り返りも同様に重要であることから、学習到達目標の設定の意義について、講話等を通して再確認し、それを活用した生徒自身による振り返りの重要性や有効性等について学ぶことも考えられる。そのためにも、教員の適切なフィードバックの在り方などについても協議や演習を通して確認することが効果的である。

⑧ALT等とのティーム・ティーチング

到達目標：ALT等との効果的なティーム・ティーチングの在り方を理解し、生徒の実態に即したティーム・ティーチングを行うことができる。

解説：ALT等との効果的なティーム・ティーチングの在り方について、日本人英語教員同士で議論するだけでなく、研修の場で実際にALT等とティーム・ティーチングを実演したり、優れたティーム・ティーチングの授業を収録した映像を視聴したりするなどして、互いの役割や授業における指導の在り方を考察する。また、ALT等を効果的に活用するためのマネージメント理論や学校や生徒の実態に即した実践方法等を学ぶ。

⑨教材研究・ICT等の活用

到達目標：生徒の実態に即した教材及びICT等の活用について理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：研修において、自分の授業用に作成した教材（ICT等を活用したものを含む）を持ち寄って相互評価したり、個人やグループで、同じテーマや指導目標に沿った教材を実際に開発・作成したりする演習をすることにより、教材研究の力を向上させる。その際、インプットやアウトプットの各段階でどのよ

うな教材をどのように提示すればより効果的であるかについて考えたり、実際に作成した教材を使って模擬授業を行ったりすることも重要である。また、作成した教材や設定した言語活動が単元目標を実現するために有効であるか、ICT等が効果的に活用されていたかなどを検討する。実際に行った授業の一部をその場で再現したり、録画した授業映像を持ち寄り、部分的に再生して相互に評価することも、教材研究を深めたり指導技術を向上させたりするのに効果的である。

⑩パフォーマンス評価を含む５つの領域の総合的な評価（テスト作成を含む）

到達目標：パフォーマンス評価を含む５つの領域の総合的な評価の仕方について、実演を通して理解し、生徒の実態に即したテスト作りや的確な評価ができる。

解説：生徒の英語運用能力を的確に測定し、適切に評価するためにも、正しいテストの作り方やパフォーマンス評価を含む５つの領域の総合的な評価に関する専門知識を、教職に就いた早い段階から身に付けておくことが不可欠である。研修においては、各自が作成・実施したテストや事例を持ち寄り、出題の意図や採点基準について意見交換を行うことが効果的である。また、設定した学習到達目標から「当該単元の学習を通じて何ができるようになるか」について具体的なイメージを共有し、観点別学習状況の評価における観点別の問題をグループで作成したり、教員自身が生徒と評価者の役割を分担しながら模擬パフォーマンステストを実施したりすることも有効である。

⑪授業研究会等の企画・運営

到達目標：英語教員の指導力・英語力強化のための授業研究会等の企画・運営の仕方を理解し、研究会等を実際に運営する際に若手教員等の指導をすることができる。

解説：これまでの自身の指導について振り返る機会を持つとともに、研修の一環として校内や地域等での授業公開と授業研究会を実施したり、教職経験の浅い教員を対象とした研修等で講師役を務める機会を設けたりする。また、中堅以上の教員は、校内での教員研修の企画運営を積極的に行うなどする。そのために、教員研修の持ち方や授業研究会の実施の仕方などを講話や演習を通して学ぶ。授業研究会については、例えば、授業を見る際はその「視点」を明確に示すことが必要であり、それによって参観者が共通の土俵に立って授業を見ることができ、協議のポイントも絞られることなどを演習等により学ぶ。

⑫モデルとなる授業

到達目標：若手教員等に対して、学習指導要領の趣旨を具現化したモデルとなる授業を公開することで、自身の指導力強化のための課題を見つけ、授業改善につなげることができる。

解説：中堅以上の教員は、若手教員等に対して、学習指導要領の趣旨を具現化したモデルとなる授業を積極的に行う。これらの実践を通して、自分自身の授業を客観的に振り返り、よりよい授業にするための課題を自ら設定し、教員として成長を続けていく必要がある。

３．専門知識

英語の実践的指導に関する専門知識を得るための努力を続けることは、英語担当教員として成長するために不可欠であり、教員としてのキャリアステージに応じた専門知識を積極的に吸収していくことが重要である。大学の教職課程で教科の専門科目として学んできたことを、生徒の実態に即した授業指導

に生かすことを強く意識して学び直したり、新たな学びにより専門性を深めたりすることが肝要である。

◇一般目標

生徒の実態に即した効果的な授業指導ができるように、英語の実践的指導に関する専門知識を実演や体験を通して身に付ける。

①第二言語習得

到達目標：第二言語習得の代表的な理論を理解し、生徒の英語習得・学習の促進に生かすことができる。

解説：第二言語はいかにして習得されるのか、そのメカニズムを扱った代表的な第二言語習得理論を学ぶとともに、それぞれの理論・仮説の示唆するものが、外国語として英語を学ぶ日本の学校の授業のどの部分にどのような方法で応用できるのかを考える。また、理論を踏まえ、生徒の英語学習が効果的に行われるために必要な指導について学ぶ。

②学習指導要領

到達目標：学習指導要領に記載されている内容を十分に理解し、生徒の実態に即した授業指導に生かすことができる。

解説：学習指導要領は、中・高等学校の教育課程や外国語科の教科・科目の内容に関する指針を理解する上で欠かせない。学校教育において英語を指導する立場となってからの経験年数の少ない教職１～３年目の教員にとっては特に、この学習指導要領に記載されている内容を十分に理解し、授業にどう生かすかを考えることは極めて重要である。

③小・中・高等学校連携

到達目標：小・中・高等学校の異校種間の連携の在り方を、実際に相互交流を行うことで理解し、系統的な指導を行うことができる。

解説：コミュニケーション能力という柱で一本につながった小・中・高等学校における英語教育を一貫して推進していくためには、異校種間の連携が強く求められる。例えば、小・中・高等学校の教員が一堂に会し、現状の成果と課題を協議したり、相互に授業を参観し合い、授業研究会を実施したりするなどの研修を通して、それぞれの児童生徒の発達の段階を理解し、指導方法、内容、教材等を共有することが考えられる。また、小・中・高等学校で一貫した学習到達目標の設定を演習等によって実際に体験し、系統的な指導の在り方について理解を深める。さらに、研修の一環として、近隣の学校同士が小・中・高等学校の接続を図った授業実践のための指導計画を作成し、実際に小・中・高等学校生の合同授業を実施することも効果的である。勤務校での既存のカリキュラムに応じて授業を行うことに慣れてきた教員には、自らが関わる英語教育をこのような大きな視点でデザインしていく力も求められる。

④カリキュラム開発

到達目標：英語教育に関わるカリキュラム開発について理解し、学校や生徒の実態に即したカリキュラム開発を行うことができる。

解説：スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール事業やスーパーグローバルハイスクール事業などにおいて開発されてきた独自のカリキュラムや、研究開発学校、英語教育強化地域拠点事業に

おける研究校等でのカリキュラム開発の事例などを参考に、目的に沿ったカリキュラムを個人やグループで考案したり、現行教育課程の下で勤務校の特性等に応じた特色あるカリキュラムを実際に構築したりすることも、英語担当教員の実践的な学びとして重要である。これらは、勤務校での既存のカリキュラムに応じて授業を行うことに慣れてきた教員に対し、特に有効な研修であると考えられる。また、各学校においては、「カリキュラム・マネジメント」の実施を促進することが求められていることから、例えば、国語科と外国語科における言語活動上の連携など、教科横断的な視点でカリキュラム開発を行ってみることも大切である。

⑤英語教育の最新事情

到達目標：英語教育に関わる最新事情を理解している。

解説：最新の英語教育改革の動向などの情報を得て、その内容を的確に理解し、自分の英語指導に活用する。大学の教職課程での学びを終えたばかりの若手教員よりも、教職経験年数の多い教員のほうが英語教育に関しての新しい情報に疎いという意見もある。このような教員に対しては特に、教員研修を通して英語教育の最新事情を理解させる機会を持つことが必要である。

⑥教職に役立つ英文法

到達目標：日本人英語学習者に英語を教える上で必要となる英文法の正確な知識を有し、その知識を実際の授業指導に生かすことができる。

解説：大学の教職課程における教科に関する科目「英文法」に対応した研修項目である。英語担当教員は中・高等学校で指導すべき文法事項を的確に理解するとともに、「文法はコミュニケーションを支えるもの」という視点を持つことが重要で（指導技術「文法指導」の解説参照）、用語や用法の解説が中心にならないように気をつけなくてはならない。同時に、学習者の視点を常に意識した指導を行うことが期待される。自分にとっては当然の知識として定着している基礎的な文法事項に関しても、教える側としての立場と視点から今一度確認する必要がある。学習者に共通して見られる誤りなどを研修において確認し合ったり、その誤りが起こる理由や指導の在り方を考察したりすることも教職に役立つ英文法を深く理解する上で有用である。

⑦音声指導に役立つ英語音声学

到達目標：日本人英語学習者に英語を教える上で必要となる英語音声学の正確な知識を有し、その知識を実際の音声指導に生かすことができる。

解説：大学の教職課程における教科に関する科目「英語の音声の仕組み」に対応した研修項目である。英語の音声的特徴（母音や子音、リズムとアクセント、イントネーション、音変化）や、綴りと発音の関係等を理解することは、より的確にコミュニケーションを行う上で重要である。生徒に対する音声指導の際に役立てることができるように（指導技術「音声指導」の解説参照）、教員自身が英語の音声的特徴を正しく音声化でき、生徒がコミュニケーションに支障が出るような発音をした際、適切に指導することができるようにする。

⑧異文化交流

到達目標：異なる文化的背景や価値観を持つ人々と積極的に交流することによって、異文化を体験的に理解し、授業指導に生かすことができる。

解説：異なる文化的背景や価値観を持つ人々と積極的に交流することによって、多様な文化を尊重することができるようになる。ALTや留学生、近隣に居住・勤務している外国人と交流する機会を持つことを研修に組み込んだり、短期・中長期海外研修等を実施したりすることによって、英語担当教員が異文化を体験的に学ぶとともに、異文化体験を通して言語をより深く学ぶ機会を計画的に設けることが必要である。

４．英語力

英語担当教員として必要とされる英語力の５つの領域の体系的・継続的向上に努めることが重要である。また、英語担当教員に求められているのは、一般的な英語力ではなく、英語を教えるために必要となる英語力であることを意識した上で研修を行うことが極めて重要である。英語コミュニケーション能力の強化のための取組は、英語教育のプロフェッショナルとして指導していく上で必須のものであることから、教員個人任せにするのではなく、研修プログラムの中にしっかりと組み込み、計画的・体系的に行うべきである。

◇一般目標

英語教育のプロフェッショナルとして英語力の強化に継続的に取り組むと同時に、英語を教えるために必要となる英語力を育成する。

①英語力向上研修（高度な言語活動の体験を含む。集中合宿、オンライン学習、短期・中長期海外研修など）

到達目標：高度な言語活動の指導をはじめ、英語の授業指導に必要な５つの領域のバランスのとれた英語を駆使することができる。

解説：高等学校においては、高度な言語活動（発表、討論・議論、交渉など）を指導することのできる英語力・指導力が今後、英語担当教員に求められる。しかしながら、日本では討論などの言語活動を学校教育に取り入れることが十分には根づいておらず、また、その経験のある教員が少ないため、積極的な指導に取り組むことが難しい現状がある。そのため、教員自身がこれらの言語活動を体験しておく必要があり、英語力向上のための研修の一部として取り入れることが望まれる。

教員研修の講師として、例えば、ディベートやディスカッションの指導に実績のある大学教員、民間企業研修の講師、これらの言語活動を既に学校で実践している教員などを招聘し、まずは教員自身が無理のないレベルから言語活動を体験することを通して効果的な指導方法について学ぶことが望ましい。さらに、それらの言語活動を英語の授業に取り入れるための段階的な指導方法について具体的に研修することが必要である。

また、教員の業務が多忙化している現状に鑑み、研修を実施する時期・形態などを考慮する必要がある。例えば、英語のみで生活する集中合宿、オンラインによる学習、短期・中長期海外研修などの形態が考えられる。その際は、教員自身が英語をコミュニケーションの手段として使用する体験を豊富に積むことに重点を置くことが大切である。

②英語の外部資格・検定試験（４技能型）を活用した英語力の自己モニター

到達目標：英語の外部資格・検定試験（４技能型）を活用することによって、自らの英語コミュニケーション能力を把握し、英語力強化に積極的に取り組むことができる。

解説：教員が自身の英語によるコミュニケーション能力を多角的・客観的に捉え、さらなる英語力向上のための効率的な研修計画を立案するためにも、外部資格・検定試験（４技能型）を積極的に活用することが望まれる。試験は定期的に受けることを推奨し、その結果を研修ポートフォリオに記録しておくことで、英語力の自己モニター及び振り返りに役立てる。

５．授業実践研究・改善

これまで概説した中・高等学校の教員研修コア・カリキュラムの研修項目に関しては、各自治体や勤務校の実態に即するように効率的に組み合わせ、一人ひとりの英語教員がそのキャリア全体を通して、英語力・指導力を強化させ、英語教員として長期的・継続的に成長していくための研修プログラムの構築を目指すべきである。このような長期的な視点に立った教員研修において、教員が自らの授業実践を研究し、改善へとつなぐためには以下のような研修上の工夫が考えられる。

（１）（異経験年数の教員で構成される）グループによる授業観察・実践の協働

研修内容に応じて、意図的に教職経験年数の異なる教員でチームを組み、互いの授業を観察し合ったり、一つの授業づくりを協働で行ったりするなどの工夫を取り入れたい。経験年数の異なる教員が学び合うことで、協議内容が広まったり深まったりすることが期待される。このような研修を通して、教員同士の情報交換や連携の不足、年齢構成の不均衡などのために、指導技術等がうまく伝わらないという問題点の解消も目指す。経験者研修を同じ経験年数の教員同士で行うだけではなく、例えば、５年経験者研修と10年経験者研修を実施している自治体では、二つの研修を一緒に行うように研修を組み立て、互いの授業映像を視聴し合ったり、共通の課題を持って授業研究をしたりすることも可能であろう。グループに対する指導にあたっては、大学と連携したり、中央研修を受けた「英語教育推進リーダー」を教員研修の指導者として積極的に活用したりするとよい。

（２）研修ポートフォリオ（授業映像ポートフォリオを含む）

教員がそのキャリアを通して成長し続けるためには、これまでの研修を振り返る機会を持つことが非常に重要である。振り返ることで、教員としての自分の成長の軌跡を客観的に捉えることができ、今後の成長のための研修の在り方や自分にとって特に必要な研修項目は何かを考えることができるようになる。研修の振り返りのためのツールとしては、研修内容の履歴を記録・保存しておく「研修ポートフォリオ」や、教員が自分の授業映像を定期的、継続的に記録保存した「授業映像ポートフォリオ」を積極的に活用するとよい。教員研修は、法定研修や免許状更新講習、県や市等が独自に実施しているものまで様々あるものの、研修内容に重複があったり、研修を受ける側・実施する側の双方が研修履歴を把握していなかったりするという問題がある。研修ポートフォリオや授業映像ポートフォリオはこのような問題の解決にも役立つ。授業映像ポートフォリオはICT等の活用によって、遠隔地で勤務しているためなどの理由で集合研修の機会を得るのが難しい教員同士でも共有することができ、グループによる授業研究にも役立てることができる。